



## 『親鸞聖人七百五十回大遠忌についての消息』をいただいて (一)

### 普賢晃壽 (ふげん こうじゅ)

ご消息の冒頭では、このたびの大遠忌法要にあうご勝縁を、未来に向かったの「おみのり」の一層の流布、正法興隆の出発点とすべきことをご教示されています。

続いて、親鸞聖人のご生涯について述べられています。その中で聖人の求道の歩みを、

九歳で出家得度され、比叡山で学問と修行に励まれました。しかし、迷いを離れる道を見いだすことができず、二十九歳の時、聖徳太子じげんの示現げんくうしょうにんを得て、源空聖人に遇われ、本願を信じ、念仏する身となりました。

とするされています。親鸞聖人が山を下り、源空聖人のもとで他力のお念仏に転入された経緯については、内室の恵信尼さまが末娘の覚信尼さまに宛てられた消息に簡潔に語られています。二十年間にわたる比叡山での自力の仏道修行の限界に行きづまり、山を下り、六角堂さんろうに参籠すること九十五日目の暁あかつき、聖徳太子の示現にあずかり、太子のお導きにより、源空聖人のもとを訪ねられ、本願真実のおみのりにまなこ開かれるにいたったことが、いきいきとするされています。

仏教とは「仏になる教え」であります。煩惱を転じ、さとりを開くことがその根本の目的であります。聖人が二十年の歳月をかけ、求め続けられたご修行もこの一点にあったといえましょう。しかしそこで、聖人が見とどけられた人間の現実がしゅうぼんのうは、底知れぬ、いかんともなし難い我執煩惱の渦に埋没せざるを得ない凡夫の姿でありました。『教行証文類』の中で、自力の修行の限界について、善導大師の、

たとひ千年の寿じゅを尽すとも 法眼ほうげんいまだかつて開けず  
(『註釈版聖典』第二版三九四頁)

とあるご文等を引用して、ご教示されています。

この自力の修行の行きづまりを、聖徳太子に尋ねられたのであります。これが六角堂の参籠であります。当時、六角堂は聖徳太子の建立された、ゆかりの寺であり、その本尊くせかんのんの救世観音は太子の本地であると信じられていました。聖人は終生、太子を和国の教主として尊崇され、また観音の化身として信奉されていました。

聖人が感得された聖徳太子のご示現の文は、今日伝わっていません。このご示現の文については、学界で種々論議されています。しかし、『皇太子聖徳奉讚こうたいししょうとくほうさん』を頂きますと、太子のお導きにより本願真実にめざめるにいたったことを、

仏智不思議の誓願に

すすめいれしめたまひてぞ

住正定聚の身となれる

(『同』六一五頁)

等と讃えられているのであります。



『恵信尼消息』にはさらに、源空聖人のもとをたずね、生死出づべき道にまなこ開かれた親鸞聖人ご自身の述懐のお言葉が、次のごとくしてされています。

ただ後世のことは、よき人にもあしきにも、おなじやうに、生死出づべき道をば、ただ一すぢに仰せられ候ひしを、うけたまはりさだめて候ひしかば、「上人のわたらせたまはんところには、人はいかにも申せ、たとひ悪道にわたらせたまふべしと申すとも、世々生々にも迷ひければこそありけめ、とまで思ひまゐらす身なれば」(『同』八一頁)

このご消息と同じ趣旨のお言葉が『歎異抄』にもしてされています。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと(法然)の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもつて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかさねまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。(『同』八三二頁)

源空聖人のおいでになるところであるならば、お念仏申したばかりに、たとえ地獄におちても後悔はしない。なぜならば、永遠に迷っていかざるを得ない私にとってみれば、ただこのことひとつ、お念仏以外に迷いの生死を超える道はない、という親鸞聖人の他力真実への絶対的な信を吐露した言葉といえましょう。

上記の『歎異抄』で源空聖人より伝えられた本願他力のお念仏について「ただ念仏して」といわれています。『唯信鈔文意』には、「唯」を解釈して、

「唯」はただこのことひとつといふ、ふたつならぶことをきらふことばなり。……中略……本願他力をたのみて自力をはなれたる、これを「唯信」といふ。(『同』六九九頁)

と釈されています。ふたごころなく本願の真実をあおぎ、念仏一行の大道を歩むことを「ただ念仏して」といわれているのであります。自分の全存在をあげて、恩師源空聖人の導きに随順して、お浄土への大道を歩む親鸞聖人の信の表白といえましょう。



このような自力から他力への聖人の<sup>えしん</sup>廻心について『教行証文類』後序において、

しかるに愚<sup>ぐ</sup>禿<sup>とく</sup>積<sup>しやく</sup>の鸞<sup>らん</sup>、建仁<sup>けん</sup>辛<sup>にん</sup>酉<sup>かの</sup>の<sup>との</sup>暦<sup>れき</sup>、雑行<sup>ぞうぎよう</sup>を<sup>す</sup>棄<sup>す</sup>てて本願<sup>き</sup>に帰す。

(『同』四七二頁)

といわれています。建仁元年二十九歳の時、源空聖人のもとで、自力の雑行を棄て、本願他力の真実に帰入された旨が素純にするされています。この源空聖人との<sup>かいこう</sup>邂逅について、『高僧和讃』には、

<sup>こうごうたしょう</sup>曠劫多生のあひだにも

出離<sup>しゅつり</sup>の強縁<sup>ごうえん</sup>しらざりき

本師<sup>ほんし</sup>源空<sup>げんくう</sup>いまさずは

このたびむなしくすぎなまし

(『同』五九六頁)

と讃えられています。源空聖人と親鸞聖人との<sup>とうと</sup>尊い仏縁があったればこそ、今日の私たちが、迷いの人生を間違ひなく歩むための法灯がめぐまれてあるのだと、頂戴するばかりであります。

(勸学寮頭)